

アメリカのCCM (Contemporary Christian Music) —— そのなりたちと性格 ——

関谷 直人

I “Could He Be The Messiah”

Been here for days, I'm amazed (at) this
teacher, carpenter, preacher
Lost in the crowd, I hear Him now,
He's praying and He's saying,
“God feed them all”
Five—thousand men, all of His friends
are
worried find bread and hurry
Five loaves and fish, what can He wish
He's praying still He's saying,
“God feed them all”
Could He be the Messiah?
Miracle man, part of the plan
Could He be the Messiah?
Life in His hand,
I understand He could be...

（“Could He Be The Messiah,” Words and Music by Michael W. Smith & Deborah D. Smith, 1982, by Meadowgreen Music Co.より抜粋）

この曲が新約聖書に登場するイエス・キリストによる「5千人の給食」と呼ばれる奇跡物語¹を下敷きとして作られたであろうことは言うまでもない。イエスがメシア（救い主）であると歌うこの曲の歌詞内容から見て、これがある種の讃美歌であろうこともまた容易に想像がつく

はずである。だがこの曲は教会の中で荘厳なパイプオルガンの伴奏と共に聖歌隊によって歌われる曲ではない。最新式のコンピュータ制御の照明システムと大掛かりなサウンドシステム（PA）を装備したコンサート会場で歌われる種類の曲なのである。演奏のスタイルは基本的に「ロックバンド」のそれである。この曲の作曲者で演奏者のMichael W. Smithはクリスチャンの演奏家である。彼の作曲する曲はほとんどが基本的にこうした「キリスト教的メッセージ」をモチーフとしたものである。彼の歌に多くのクリスチャンの若者が共感し、レコードを買い、コンサートにやってくる。いや、クリスチャンばかりではない。多くの、いわゆる「ノンクリスチャン」と呼ばれるキリスト教の教会に所属しないアメリカの若者たちも、今、彼の音楽に惹き付けられているのだ。

かつてこうした音楽はゴスペルと呼ばれたり、“Jesus Music”と呼ばれたりしていたが、現在ではCCM（Contemporary Christian Music）と呼ばれることが多い。別名“Jesus Rock”とも呼ばれたことがあるように、かつてはCCMはRock音楽が主流だったが、現在はそれほど単一ではない。1997年10月号のContemporary Christian MusicのChart（レコード売り上げなどを記したページ）を見ると、“dc Talk”, “Steven Curtis Chapman”, “Amy Grant”他、多数のアーティストの名前が並び、彼らの音楽はロック、カントリー、ジャズ、スローバラードなどはもちろんのこと、ヘビーメタル、ラップ、ハウスまで、ありとあらゆるポピュラーミュージックのスタイルをカバーしている。このCCMは今やアメリカのミュージ

¹ Mt. 14:13-21, Mk. 6:35-44, Lk. 9:12-17を参照。

ックシーンを考える際に無視できない音楽の一分野となってきたのである。実際、1996年度のRecording Industry Association of America (RIAA) の報告によれば、CCMは、いわゆるゴスペル部門のドル箱であり、全米のレコード売り上げの4.3パーセントを占めるようになったという。²

これはキリスト教離れが言われて久しいアメリカの若者に対する、キリスト教エバンジェリズムの勝利なのだろうか。あるいはアメリカのレコード業界は新たにCCMという有望な収入源となる音楽分野を得たのだろうか。なぜ、今、キリスト教的なメッセージを基調としたCCMが世俗化された社会に生きる多くの若者を惹き付けてやまないのか。ヨーロッパや他のキリスト教が盛んな国ではほとんど見られない、ある種アメリカ固有の現象ともいうべきこのCCMについて、これまで日本で紹介されることは極めて少なかった。そこでこの小論を通してこれまであまり日本では紹介されることのなかった「現代キリスト教音楽」、CCMについての理解を促すとともに、アメリカ固有の現象とも言うべき社会現象であるCCMについて考察することで、そこから見えてくる現代のアメリカにおけるキリスト教と社会の一面に光をあてたいと思う。

II CCMに関する研究

音楽・芸能関係者による報告や分析を除くと、日本においてはキリスト教の立場からのこの分野に関する研究はほとんど見られない。そもそもCCMという言葉自体、日本に住む多くの人々にとっては聞き慣れない言葉であるに違いない。最近ではCCMとメジャーレーベルとの提携のおかげで、音楽自体は輸入されたり、テレビやラジオなどを通して国内にも入ってくるようになったのだが、英語の歌詞の意味を理解して聞クリスナーはそれほどいないと思われる

ので、CCMもそれとして意識されて聞かれることは少なく、いわゆるロックであるとか、パンクであるとか言った聞かれ方をしているものと思われる。

一方、先に述べたように、CCMはかなりアメリカ固有の現象であるので、アメリカ国内では多くの研究がなされていそうなものであるが、実際にはアメリカにおいても、CCMに関する学問的な研究は決して多いとは言えない。あったとしてもかなりエバンジェリカルな立場から考察したものが多く、CCMの在り方を客観的に吟味するものとは言い難い。恐らくこれはこの現象が比較的最近のことであることや、CCMがポピュラーカルチャーの一部として見られてきたために、はたして学問研究の対象になりうるのか（特に神学の分野からは）という目で見られてきたためではないかと想像される。

そんな数少ない研究の中ではPaul Bakerの*Contemporary Christian Music: Where It Came From, What It is, Where It's Going*³ は古典的な研究書である。あるいはWilliam D. Romanowskiは、*American Evangelicals and the Mass Media*の中でContemporary Christian Music: The Business of Music Ministry⁴ を著わし、題名の通りCCMと音楽業界との関わりに注目している。あるいは比較的新しい研究としては、Jay R. HowardのArt versus Evangelism: The Tension of Contemporary Christian Music⁵がある。Howardはこの中でCCM業界が求める宗教的な要素と、アーティストとしてのCCMミュージシャンたちが追及

3 Paul Baker, *Contemporary Christian Music: Where It Came From, What It is and Where It's Going*, (Westchester, IL: Crossway, 1990).

4 William D. Romanowski, "Contemporary Christian Music: The Business of Music Ministry" *American Evangelicals and the Mass Media*, ed., Quentin J. Schultze, (Michigan, Zondervan Publishing House, 1990), 143-169.

5 Jay R. Howard, "Art versus evangelism: The Tension of Contemporary Christian Music", *All Music-Essays on the Hermeneutics of Music*, eds., Fabio B. Dasilva and David L. Brunnsma (England: Avebury, 1996).

2 1996年度RIAA報告による。(URL: <http://www.riaa.com/market/releases/demosu96.htm>)

しようとする芸術的な質との間の葛藤について論じている。CCM関連の雑誌もいくつか発行されている。なかでもCCMという言葉を一 generally 知らしめた月刊誌 *Contemporary Christian Music Magazine* は、1978年の発刊から現代にいたるまで変わらずCCMの普及に勤めている。もっとも初期に見られたCCMの「護教雑誌」的なイメージは今はなく、最近ではもっぱらCCMアーティストたちのカバーストーリーや新譜のレビューなどを中心とした編集内容になっている。他にも学術雑誌に掲載された論文がいくつかあるが、決して研究成果の豊富な分野とは言いがたい状況である。しかし全体としてポップ文化と宗教や思想に関わる関心は年々高まりを見せているように思える。日本においてもこの分野に対する関心が高まることを願いつつ、上記の業績・資料を用いつつCCMに対する考察を試みる。最初にCCMがどのようにしてアメリカにおいて芽生え、発展していったかを見ていくことにする。

III CCMのなりたち

1. Jesus MovementとJesus Music

RomanowskiによればCCMは1960年代後半にアメリカで盛んとなった“Jesus Movement”にルーツを求めることができる。その担い手であった人々、いわゆる「ベビーブーマー世代」は、音楽的に言えばJohn Lennonの「イマジン」世代ということができ、ケネディ大統領の提唱した「ニューフロンティア」を合言葉に、活気に満ちた1960年代の前半を歩んでいた。彼らは「平和、調和、そして愛の世界を思い描いて (imagined) いた」のであるが、1960年代後半に入ると、政治的暗殺、公民権運動の高まりと失望、ベトナム戦争に対する無力感などのさまざまなフラストレーションがアメリカ国内に充満していた。そのような気運の中で、アメリカ国内の保守派キリスト教を中心にして、ある種の信仰覚醒運動が起こる。いわゆる“Jesus Movement”である。Romanowskiはこれを(1)工業・科学技術的社会に対する対抗

文化的拒絶 (Counter-cultural rejection) としての運動、(2)現代神学と「反動的な牧師」としての役割を担っていた主流派教会に対する拒絶としての運動、(3)聖書を基礎におき、ヒッピーの原型としてのイエスの人格を中核とする運動であったとする。⁶

このような政治的な動機を内にはらんでいた“Jesus Movement”であったが、実際にはマリファナ、LSDに代表されるドラッグの使用を中心とした「運動内運動」の様相を呈していた。また運動内部では聖と俗、光と闇といった聖書的二元論の影響により、「外の世界」を汚れと罪にまみれた世界として見る傾向が強まった。そのため当時の社会のさまざまな問題に対しても、社会構造の変革よりは、個人の内部の信仰による魂の救済にその解決方法を求めることになった。これらのことは、この運動をルーツとするCCMの持つ性格にも大きな影響を与えていると思われる。⁷

“Jesus Movement”という社会的背景の中で、「古くさい」既成教会の礼拝のスタイルに飽きたらない一部のクリスチャンらが、当時の若者文化を代表する言葉であったロックミュージックを自らの中に採り入れようとする。こうして生まれた“Jesus Rock”あるいは“Jesus Music”は、讃美歌として歌われたり、パイプオルガンなどで演奏されたりする、それまでの伝統的なキリスト教音楽の枠組みから大きくはみ出したもので、アコースティックギターやエレキギターなどの現代楽器を用いたロック調の音楽に、キリスト教的メッセージをのせたものであった。図式化に過ぎるかも知れないが、それらは「イエス・キリストを受け入れることで全てが解決する」的な“Jesus Movement”の一つの性格をそのまま表現しているような音楽

6 Romanowski, pp. 146-147.

7 Klemet Preus, “Contemporary Christian Music: An Evaluation,” *Concordia Theological Quarterly* 51:1 (January 1987), 2. の中で、KlemetはCCMの歌詞を分析しつつ、“Contemporary Christian music in most of its forms either explicitly states or presupposes a troubled world.”と指摘している。

であり、当時の時代の先行きの不透明さは、明快に解決策を保証してくれるように見えたこれらの“Jesus Music”へと人々を向けさせた。Romanowskiはこうした時代の要請が「1970年代にあふれていた、目的を失った若者たちに伝道するための新しい音楽のスタイルを採用することを強力に正当化することになった」⁸と述べている。

2. Jesus MusicからCCMへ

1970年代の後半に入ると、教会は“Jesus Rock”よりももっと現代的でより洗練された音楽を求めるようになった。しかしRomanowskiによれば、1970年代全般を通して、当時のキリスト教音楽業界は、(1)現代的なキリスト教音楽を受容する聴衆の不足、(2)劣悪なレコーディング技術、(3)ローカルラジオ局を中心とした極めて限られたキリスト教ミュージシャンたちの「出番」、(4)主にキリスト教書店に限定されていた、非常に小さく不十分なレコードの販路、⁹の4つの問題を抱えて大きく伸び悩んでいた。キリスト教音楽業界をこうした閉塞状態から救い出すきっかけとなったのは、1975年の夏にコロラドで実施された「第一回キリスト者音楽家セミナー」であった。同年には「現代キリスト者宣教団」(FCCM)も組織され、1978年に創刊された*Contemporary Christian Music*の援護もあって、現代キリスト教音楽は“CCM”の名称の知名度の高まりと共に少しずつ成長をしていく。この頃までに、現代のCCM業界の大手であるWord Recordsはビジネス的には成功をおさめており、Myrrh, Sparrow Recordsなど現在CCMビジネスの中核を担っているレコード会社が相次いで設立された。

個々のアーティストに関しては、1978年にキリスト教音楽界のグラミー賞とも言うべき“Dove Award”を受賞した“Rise Again”を歌ったDallas Holmが、CCMの世界でいえば、いわゆる「ビッグヒット」を飛ばしていたし、1982年に飛行機事故で亡くなったKeith

Greenもこの時期にSparrowと契約を結んでいる。後に「CCMの女王」と称されることになるAmy Grantが若干15歳の若さで最初のレコードの契約をしたのは1975年であった。こうして1970年代から1980年代に移行していく中で、CCMは比較的経営的に安定したビジネスとして見られるようになる。それまでいくぶんボランティアベースの色彩が強かったキリスト教音楽界がビジネス的色彩合いを濃くし始めた時代でもあった。CCM関係者の一人であるJohn Fischerは以下のように当時のことを振り返る：

私が当時の状況を振り返る時に重要だと思うのは、あのころ全く仕事として（CCMをやっていくということ）考えていなかったということです。（中略）今、歌って、言葉を伝えて、この世に対して挑戦して、それに私たちにはもうあまり時間が残ってないんだと信じていましたね。こういうのがあの当時我々が思っていたことでした。ところが70年代後半になって、だんだんと一つの思いが形になってきたわけですね。それは『ちょっとまてよ。私たちはここでずっとやっていっていいんじゃないか！』ということだったんですね。¹⁰

もっとも、相変わらずCCMの主な販路は全国のキリスト教書店を中心としたものであったし、ローカルのキリスト教ラジオ放送を中心とした音楽の伝搬経路は依然としてCCMにとっての「生命線」であった。CCMがいわゆる「世俗」の音楽と同じ次元で語られるためにCCMは「スター」を必要としていた。

3. キリスト教書店から抜け出したCCM

Amy Grantが1983年にキリスト教的なメッセージを前面に押し出したアルバム“Age to Age”を発表するや、アメリカの音楽業界はそ

8 Romanowski, pp. 148-149.

9 Romanowski, p. 152.

10 April Hefner, “DON'T KNOW MUCH ABOUT HISTORY”, *CCM Magazine Online*, 19:10 (April 1996). (URL: <http://www.CCMcom.com/CCMmag/96apr/0496history.html>)

れまで自分たちが見逃していた巨大な市場があったことを知ることになる。“Age to Age”は上記のような限られた販路と知名度にもかかわらず、しかも当時普及し始めていたケーブルネットワーク上でのプロモーションビデオクリップ(MTVを代表とする)を用いることもなく、ビルボードのトップチャートに158週間も留まったのである。以来、彼女は“Straight Ahead”1984、“Unguarded”1985、“Lead Me On”1988、“Heart In Motion”1991、“House Of Love”1994、そして1997年の夏には“Behind the Eyes”など次々とヒットアルバムを出しつづけており、その間に5回グラミー賞を受賞している。セックスも暴力もドラッグもない、キリスト教のメッセージを折り込んだポップミュージックがアメリカの若者を惹き付ける。しかも教会に所属していない若者の多くがこの種の音楽に魅力を感じるようになってきている。アメリカの大手レコード会社は戸惑いつつもこの決して新しくはないが、それまでマイナーな存在であったCCMに注目しはじめる。この出来事と前後して、アメリカの大手レコード会社はこぞって自社内部にCCMの部門を設立したり、既存のCCMレーベルと提携を結び、その販路を一般レコード店へと拡大していく。こうしてCCMはついに世俗の音楽業界へ名実ともに参入していくことになったのである。

IV CCMの性質

次に CCMの内容について目を向けたいと思う。CCMは一体どのような内容を持つ音楽であるのか、音楽としてのCCMについてそのスタイルとテキストの両面から観察たい。

1. CCMは音楽のスタイルではない？

CCMは音楽のスタイルではない。これはCCMについての共通した見解の一つであろうと思われる。¹¹ なぜこれが音楽のスタイルでないのか。それは最初に述べたように、CCMが現在アメリカで聞かれているポップ音楽のほ

ぼ全てのジャンルを含んでいるからである。そこにはポップ、ロック、カントリー、ゴスペル、ジャズ、R&B、ラップ、中にはプログレ、ヘビーメタル系のバンドさえある。CCMは例えばゴスペルや黒人霊歌(スピリチュアル)のように、なんらかの文化的社会的背景から生まれた固有のキリスト教音楽スタイルではない、それはすでに存在している音楽スタイルを効果的なメッセージの担い手として用いる、言うなれば「やどかり音楽」的側面を持っている。だからCCMをCCMたらしめているものは、そのリリック(歌詞)なのである。こうした立場でCCMを定義するとすれば、CCMとは、「現代的・大衆的音楽様式の中で、キリスト教的メッセージを、それが直接的か、象徴的かはともかく、そのメッセージを表現するリリック(歌詞)によって伝える音楽」ということができるのではないかと考える。

2. CCMに見られるキリスト教的メッセージの変遷

しかしながら「キリスト教的メッセージ」と言う場合に、時代によっても、またアーティストのとり立場によっても随分幅があるのも事実である。紙面が限られているので、ここでは先に述べた女性CCMシンガーの代表的存在であるAmy Grantの「出世作」とも言うべき“Age to Age”(1983)と、1997年夏に発売になったばかりの彼女の最新アルバムである“Behind the Eyes”からそれぞれ一曲ずつ選び、彼女の中で「キリスト教的メッセージ」がどのように変化してきたかを見てみよう。

Amy Grantは、“Age to Age”中の“Sing Your Praise To The Lord”で次のように歌った。

Sing your praise to the Lord,
Come on everybody,
Stand up and sing...one more
Hallelujah,

11 Jau R. Howard, p. 149.; Romanowski, p. 150.

Give your praise to the Lord,
I can never tell you,
Just how much good...that it's
Gonna do ya

(後略)

(“Sing Your Praise To The Lord,” Words and Music by Rich Mullins 1981 Meadowgreen Music Co./ASCAP)

この歌詞は一見ただけで、旧約聖書の詩編からインスピレーションを受けたものであることがわかる。¹² この記念すべきCCMアルバムには他にも“I Have Decided”、“El Shaddai”、“Arms Of Love”などの曲が収録されており、直接的にキリスト教のメッセージを前面に押しだした曲が多い。その後のアルバムも基本的にこの路線にしたがっているように見える。ところが1994年に発表された“House of Love”になると、大文字の“He”¹³を用いた間接的な表現も含めて少なくとも「神」や「イエス」をはっきりと表す表現は姿を隠す。さらに最新アルバムの“Behind the Eyes”に収録されている、たとえば“Like I Love You”などに目を向けると、もはや、いわゆる「世俗」のラブソングとの違いを見いだすことが困難な歌詞内容になっている。この曲は、“Why do lovers drift apart/How does love fade away”で始まり、“How long have you been feeling lost and lonely/How long have you been sad and blue/This time, baby, I’m learning how to love you, love you/Ain’t nobody gonna make you cry...” (“Like I Love You,” Copyright 1997, A&M Records, Inc.) と続いているのである。筆者もアメリカのキリスト教保守派の集会に出席した際に、「Amy Grantは信仰を捨て、音楽ビジネスに自分自身を売り渡した」という意味の批判を数人の人から聞いた。彼女が信仰を捨てたかどうかは別にしても、彼

女の音楽に見られるこうした変化は確かにCCM業界全体の一つの流れになっていると言える。そして私の考えでは、それはCCMがその世界を広げ始めた時からすでに内包していた、一つの必然的な緊張関係から起こったものである。

町から町へ興行してまわり、そこでプライベートレーベルの自分たちのレコードを売り歩く、あるいはキリスト教書店でクリスチャンが一枚、二枚と買っていく。そういう時代は過去のものとなった。CCMは今や巨大な音楽マーケットを泳ぎ回るビジネスの一つである。また全米のヒットチャートにCCMが名前を連ね、MTVでビデオクリップが流されるようになった時、おのずと音楽としての「質」が問われてくるようになる。もはやCCMは自宅のガレージに置かれた、民生機8トラックレコーダーから生まれてくるのではない。プロデュースから録音、プレスに至るまですべてのプロセスがプロフェッショナル集団によって進められるのだ。そこにおのずからそれまでCCMが出あったことのなかった緊張関係が生まれてきたであろう。それはCCMの持つ機能が要求する三つの要素の間に起こる緊張関係である。すなわち(1)芸術としてのCCM、(2)キリスト教の伝道手段の一つとしてのCCM、(3)ビジネスとしてのCCMである。

V CCMの中に見られる3つの緊張関係

1. 芸術としてのCCMとキリスト教の伝道手段としてのCCM

CCMは音楽という一つの芸術に属する活動である限りにおいて常にその質が問われる。一方、キリスト教の伝道手段としてのCCMは、音楽の質よりもキリスト教信仰内容の質の方を重要視する。この場合、信仰内容の質というのは必ずしも神学的なレベルをさすものではない。CCMを支えてきた比較的保守的なキリスト教派にとっては、どれだけ福音伝道的であるかがその質を計る尺度となる。この二つの要求は必ずしも一致しない。歌詞の中で、「イエス・キリスト」、「神」、「聖霊」、「愛」、「全能」、「ハレ

12 Pss. 21:13, Pss. 66:2, Pss. 71:22, Pss. 104:33, Pss. 135:3, Pss. 138:1, Pss. 146:2など。

13 伝統的にイエス・キリスト、あるいは神を表現する際に大文字の“He”を使う習慣がキリスト教の中にあったが、現在では性差別の観点から、意識的にこの用法を避ける人が増えてきている。

ルヤ!」,「ホザナ」などのキリスト教的用語ばかりを用いることは、時として音楽全体を安っぽいものにしてしまう危険性がある。リスナーの対象が広がるにつれて、多くのCCMアーティストたちが、自分たちの音楽の芸術性を維持し、一般の多くのリスナーたちに受け入れられるようにと、しだいに直接的な表現を避け象徴的な言葉や表現を用いてキリスト教の信仰内容を伝えようとしているようすが、Amy Grantを始め、冒頭で紹介したMichael W. Smithなどの古参のCCMミュージシャンの中にさえ見取れる。しかしこの事はCCMのアイデンティティーを曖昧なものにすることにもなった。

2. 芸術としてのCCMとビジネスとしてのCCM

ビジネスとしての側面はCCMに対してただ一つの事を要求する。「一枚でも多くのレコードを売る」ということである。それは手段を選ばないので、時にはキリスト教的用語で埋め尽くされた音楽を求める場合もあるし、¹⁴ 全く反対に極端にエバンジェリカルな表現を避けたソフトなCCMを求める場合もある。¹⁵ いずれの場合においても、CCMの芸術的側面は自分たちの音楽に対するこのような恣意的な圧力に対して断固として拒否せざるを得ないのであるが、現実的にはミュージシャン生命を維持するための手段として妥協を余儀なくさせられる場面が多いであろうことは想像できる。かつてミュージシャンの主導の音楽であったCCMが、市場の原理に従って企画されプロデュースされる音楽へと変化していく中で、CCM自体の価値が損なわれたとは言えないまでも、それがその主体性を失ってきたことは事実であろう。

14 Tim StaffordはMargaret Beckerとのインタビューで、彼女が「『イエス』という言葉一回でも多く歌の中で言えば、その分だけレコードの売り上げが伸びる」と答えたことを紹介している。(Tim Stafford, "Has Christian Rock Lost Its Soul?", *Christian Today*, 37: 14 [Nov. 1993] 18)

15 Jau R. Howard, p. 153. に、こうしたレコード会社からのプレッシャーに対して契約を拒否したグループ“Savior Machine's”について言及されている。

3. 伝道手段としてのCCMとビジネスとしてのCCM

伝道手段としてのCCMとビジネスとしてのCCMの間には、大きくわけて二種類の関係が存在すると考えられる。ビジネスという世俗の世界へと深く関わっていったCCMを「この世的なもの」「汚れたもの」として見、現代的なキリスト教音楽としての価値は認めるものの、いわゆる“Praise Song”²と呼ばれる教会を中心として歌われる音楽に重点を置いて、CCMに対しては批判的な態度をとるもの。もう一つは、エバンジェリズムの重要な目的の一つである「一人でも多くの人を救う」というスローガンの下で、衛星放送、全米を網羅するケーブルネットワークや大型レコード店の販路などを通じて、アメリカ全土、否、世界中に広められるCCMの方向性¹⁷ と自らを同調させていくものである。CCMのミュージシャンの一人Rich Mullinsは言う。「レコード会社の最終目的はお金を儲けることです。だからあなたがどんどん伝道をするのは（つまりレコードを売れば）、なんらレコード会社の機嫌を損なうことではないのです」。¹⁸

キリストの福音はCCMのCD、ビデオクリップ、コンサートの中にある。福音伝道の成果はそこではもはや「ピューコール」¹⁹ に応えて信仰を告白した人々の数ではない。それはコンピュータが逐次ディスプレイに映しだすCDやコンサートのチケットの売り上げ枚数であり、ラジオやネットワーク上での「カウントダウン」の動向は「伝道の力」を示すバロメータとなる。

16 Praise Songを中心に活動している中で、もっとも活発に活動している会社としては“Maranatha! Music,” Nashvilleがあげられよう。

17 「わたしは天と地の一切の権能を授かっている。だからあなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にきなさい。」(Mt. 28: 18b-19)

18 Tim Stafford, p. 17.

19 福音伝道の説教などが終わった後に、「今、ここでイエス・キリストを受け入れた人はどうぞ前へ進み出て下さい」と説教者が会衆に呼びかけ、前へ進み出た人々が場合によればその場で洗礼を受けるというシステム。現在ではエバンジェリカルな教会を除くとそれほど一般的なシステムとは言えなくなった。

こうした考え方は、CCMとほぼ時を同じくしてアメリカでその影響力を拡大していったテレビ伝道者の間に共通項を見いだすことができる。その共通性を詳細に検討する余裕はここではないが、そこにアメリカ社会のエンターテインメント指向²⁰と、テクノロジー指向、²¹ 当時のアメリカにおける「時代の要請」という三つが深く関わっていると見るのはあながち検討はずれではあるまい。特に最後のアメリカにおける時代の要請について言うなら、“Jesus Rock”という「対抗分化（カウンターカルチャー）」の運動を母体として生まれた音楽は、その後「結局何も変わらない」というアメリカの幻滅と共にその吸引力を失っていったのは当然であり、『「カウンター・カルチャー」に対する『カウンター・パンチ』』²²としての保守化傾向が、CCMというセックスもドラッグもない音楽を要請したとも言えるのではないだろうか。そこには若者が満足できるような全ての音楽のジャンルが用意されているのだが、それらすべては「クリーン」で、「安全」なメッセージからできているのだ。アメリカにおけるCCMの現在の隆盛を見るときに、こうした現代のアメリカ社会の性質との親和性をCCMが潜在的にもっていたと考えられるのである。

VI CCMの明日

90年代に入ってCCMのビジネス的側面はますます強調されてきているように見える。キリスト教的用語が前面に押しだされているにせよ、

あるいはソフトで遠回しな表現が使われているにせよ、その目的は市場の要求に合ったものをタイミングよく提供することにある。CCMの購買層への売り込みを狙って、近年ではキリスト教的なメッセージを折り込んだポップミュージックを演奏の中心に掲げているが、その実バンドのメンバーにはだれ一人クリスチャンがいないというバンドまで現れはじめている。²³ 皮肉な事にいかなる意味でも音楽のスタイルではないはずのCCMが、後発の「世俗」の参入組からは、それをコピーしさえすればメガヒットを出せるかも知れない、一つのスタイルとして見られるようになったのである。

今、市場の原理に導かれて生産されるCCMに、その時代に語りかける真に預言者的な言葉はあるのだろうか。あるいはまた、キリスト教的なメッセージを男女のラブソングに重ねて歌う時、はたしてその歌は他のいわゆる「世俗」の歌に比べて真の「新しさ」を持ち、その求心力を持ち続けていくことができるのだろうか。キリスト教のサイドから見ると、今CCMはこうした問いの前に立たされていると言える。けれども、1997年に入ってもアメリカにおけるCCMの勢いは陰りを見せる様子はない。むしろますますアメリカの若者の心をつかんでいるように見える。そこに単なるレコード業界の企業努力以上の力が働いているとしか考えられないのである。

移民たちの国であり、多民族国家であるアメリカが一つとなっていくために要請される「見えざる国教」²⁴としてのキリスト教が背後にあるとするなら、対抗文化に幻滅し、自己解体の予感にさらされたアメリカの若者たちが耳を傾ける歌は「世俗の歌」ではありえない。そこには自分たちを統合へと導くメッセージを含んだ歌、すなわち自分たちを「約束の地」へと導く「聖なる歌」が要請されるのである。そしてCCMこそが、まさしくアメリカの若者たちにとって、そのような役割を果たしてきたのでは

20 Neil Postman, *Amusing Ourselves to Death* (London: Viking Penguin, 1985) の6章 “The Age of Show Business,” pp. 83-98で入門的な議論がされている。

21 John M. Staudenmaier SJ., “Moving at the Speed of Light: The influence of Communications Technologies on Modern American Culture,” *Communicating Faith in a Technological Age*, ed., James Mc Donnell and Frances Trampets (England: St Paul Publications, 1989).

22 森孝一「統計からみるアメリカ宗教の現状と特質」、森孝一編、『アメリカと宗教』、(日本国際問題研究所, 1997), p. 16.

23 Mr. Misterなどがその一例。

24 森孝一、『宗教からよむ「アメリカ」』、(講談社選書メチエ, 1996), pp 34-99.

ないだろうか。

毎週、否、毎日のようにアメリカで新しいCCMの新曲がリリースされる。それは宗教曲であり、アートであり、またビジネスである。もはやそれらを区別してCCMを語ることはナンセンスなほどに、それらは一体となってアメリカの社会に響き渡っている。そしてそれが何と定義されとしても、結局それらはアメリカ社会の根底に横たわる「見えざる神」へのひとつの讃美歌であり、人々のさまざまな思惑や野心をはるかに超えて、それ自体がアメリカ社会

の歌声を代弁しているのである。

新しい歌を主に向かって歌え
全地よ主に向かって歌え
主に向かって歌い、御名をたたえよ
日から日へ、御救いの良い知らせを告
げよ

(詩編96篇 1 - 2)